

大学啓蒙

大学乃道、在明明徳、在親民、在止於至善

(大学の道は明徳を明らかにするに在り。民に親しむに在り。至善に止まるにあり)

「大学」はもと「中庸」とともに「礼記」の諸篇の一つであった。唐の韓愈などがその内容に注目し、朱子学の集大成者である南宋の朱熹(朱子)によって「礼記」から抜き出されて一冊の書物として編纂・注解された。朱熹の先輩格・程明道は、＜大学は孔氏(孔子及び道統の学者たち)の遺書にして、諸学徳に入るの門なり＞といい、朱熹は儒学を学ぶ者が読むべき書として重要視した「四書」の第一番に置いた。

朱熹は「大学」を、＜大学の書は、古の大学校で人を教育する際の大方針を述べたものである＞と言っているが、その説の是非はともかく、この書が儒教政治思想の根幹である“修己治人”の道を教え諭していることは事実で、原文はわずか千八百字弱の小冊子ながらリーダーたるべき者の心得が要領よく諄々と説かれている。標記掲載の文章はその首章である。

明明徳、親民、止至善を一般に「三綱領」と呼ぶ。「大学」の帰結する要点を冒頭に示したのである。中国古典の文章術は往々にして首章に先ず結論を述べ、爾後それを展開する方式を採る。「三綱領」を大雑把に解釈すれば、＜リーダーたる者は、明徳を明らかにし、民に親しみ、最高の善所に踏み留まらねばならぬ＞、というのである。以下「明明徳」「親民」「止至善」について概説することにしよう。

先ず「明明徳」とは何か。朱熹「大学章句」は、＜明徳とは、人が天から得た所のものであり、虚霊不昧(きょれいふまい＝心の本体は虚であり空であり、しかも明哲なこと)で理によって万事に応ずる霊的な働きがある。このように本体の明は未だかつて止むことはないのだが、人の生まれつきは偏ったり汚れたりしていたり、又私欲に害されるため昏(暗)くなってしまう。明明徳すなわち明徳を明らかにする、というのは、リーダーたる者はそれを知り、学問・修養して本来の穢れない明徳に復帰すべく努力することをいう＞と解釈した。

朱熹の後に陽明学を興した王陽明は、「大学問」で、「大人とは天地万物を以て一体となす者のことを言う。その心の底に大仁があって、幼児が井戸に落ちんとすればああ危ないと思い、鳥獸が哀れな場合はそれを忍びない心が起こり、草木が折れていたり瓦石が壊れていれば同情したり惜しんだりする。これすなわち幼児・鳥獸・草

木・瓦石と一体となることで、いわば「一体の仁」ともいえる心の働きが生来備わっているのである。大人だけでなく私欲にまみれていない時の小人だって同じことだ。この人間本来具備する良心こそが明德で、良心に従って私欲の蔽いを去り、天地万物一体の本然に帰すことを**明明徳**という」と良心に従うことが「明德を明らかにする」意だと解釈した。

繰り返せば、**明明徳**を朱熹は人の生まれつきや私欲で穢れた本然の徳を、学問・修養で復歸させる努力とし、王陽明は人間が本来具備する良心の声に従って私欲を払うことと解釈したことを述べた。その他諸説紛紛あるが、端的に言えば、仁・義・礼・知・信などの善徳を広く明らかにすること、と考えてよいだろう。すなわちリーダーたる者は克己精励して人民や部下に対して善徳を大いに発揮すべし、ということである。

次に**親民**についてであるが、これまた解釈が大きく割れる。そもそも「**親民**」を「民に親しむ」「民を親しむ」「民を親(新＝あらた)にす」と読み下し方に相違がある。「民に親しむ」が「古本大学」の立場で、王陽明等はそれを是とし、「民を親(新＝あらた)にす」とするのが新注派の代表・朱熹である。不思議なことに一番オーソドックスな読み方「民を親しむ」と訓ずるのは老生くらいなものである。

議論を巻き起こしたのが朱熹である。「大学」を死の直前まで読みかつ注解に凝った朱熹は、「大学」の数章後に「書経に作新民とある」という文章から「民を作新す＝人民を新しく作興せよ」の「新」と「親民」の「親」は同義語なり、として「民を親(新＝あらた)にす」と解釈すべきであると主張したのである。

これについて種々の議論が連綿となされたのだが、結論から言えば、老生は我が国の陽明学者であった大塩中斎(平八郎)の説を最も妥当とする者である。以下大塩中斎「洗心洞箚記」に曰く、

＜大学の首章、明の字、親の字、止の字は、皆自分自身が関わる工夫である。もし親の字を改めて新の字に作れば、自ら責めずしてこれを他人に責めることになる。これを他人に責めるのは、則ち大学の本旨ではない。しかも新は彼(相手)に属す、彼に属する者は、聖人と雖もこれを如何ともすることができない。例えば

堯舜は聖人である。彼らは“子を愛する”明德を明らかにした。しかし堯の子・丹朱、舜の子・商均は不肖の子で新にすることが出来なかった。

禹は“父を愛する”明德を明らかにした。しかし鯀を新にすることが出来なかった。(鯀は堯舜に洪水対策を命ぜられ失敗して誅殺された)

周公は“兄弟に友愛”の明德を明らかにした。しかし兄弟の管叔・蔡叔を新に出来なかった。(二人は周公に反乱を企てた)

孔氏三世、“男女室”に居る明德を明らかにした。しかし皆離婚した。(孟子離婚説もあり)。

これを以てこれを觀れば、則ち聖賢と雖も盡く他人を新にすることはできない。(中略)故にただ子たれば孝の明德を明らかにして父に親しみ、そして至善に止まる。臣となれば、忠の明德を明らかにして君に親しみ、そして至善に止まる。新・不新を君父(相手)に責めず、自分が相手を親しむ努力をすること則ち「心を尽し性を尽くす」べきことが、本来の「大学」の言わんとするところである。そして相手を「新にする」のも結局はその中に在るのである。故に舜の父母である瞽瞍夫婦及び象(弟)は、舜に意地悪したが、うまくおさめて姦惡に至らなかった。要するに舜が「民を親しむ」の工夫によって相手を善化したのである。>と。

次に止至善について述べる。止至善すなわち「至善に止まる」とは、「至善＝最高の善」に「至り止る」こと。「至善」は最高の善をいい、例えば君の仁、臣の敬、子の孝、父の慈、友の信などを顕現することを指す。朱熹は、<至善はすなわち事理当然の極地をいい、殆ど私欲のないこと>と言っている。いずれにせよリーダーたる者は千鍛万練、不断の道徳的修養を義務付けられる。

「止まる」とは、至善に至るまで修養することと、至善に至ったらその状態を維持することを指す。なぜ「止まる」ことが重要なのか。「大学」は次のように述べている。

止まるを知って后(後)定まる有り、定まって后能(よ)く静かに、静にして后能く安く、安くして后能く慮(おもんばか)り、慮りて后能く得。

どこに止まるべきかを自身の規範としていれば、すなわち最高善に行き着くまで修練しそれを保ち続けることがリーダーたる者の使命だと自覚すれば、志が定まり幾多の試練にも迷うことなく腹を据えることが出来る。志定まれば慌て騒がず静寂な安き心で時務に当ることができる。安静なる時は熟慮することができ、その省察や決断は的中を得る。これが定 静 安 慮 得が「止まる」ことによる効能である。蓋し簡にして要を得た名文章である。

特に至善を維持することが難しい。志を立て懸命に尽力している間は目標に向かって邁進しているだけに、寧ろ雑念が入らずそれに専心できるが、一旦志を得るや気が緩み慢心の気漸くに兆してくるからである。「醉古堂劄掃」に曰く、

名を成すは毎(常)に窮苦の日に在り、事を敗るは多くは志を得るの時に因る。

(後日名を成すのは困窮の日に懸命に勉勵するからだ。逆に事敗れ失敗するのは、多くは志を得て驕慢怠惰になるときだ)

＜唐の太宗が「天下を守ることは難しいか易しいか」と問うた。魏徵曰く、「甚だ難しゅうございます。なとなれば、古来の帝王の事跡をみるに、憂危のときは賢人を抜擢しその諫言を受けております。が、一旦志を得て権力を握ると必ず寛怠になり、事を奏する臣下たちはただ殿様の顔色を伺うようになってしまっています。その結果日々国力は衰え、遂には危亡に至ってしまうのです」、と。＞(「貞觀政要」)

リーダーたる者の使命とはいえ、志を至善に保つことは至難なことである。

物に本末有り、事に終始有り。先後する所を知れば則ち道に近し。

総てものごとを為すには本末・終始があつて、本・始からスタートして末・終に至れば事無きを得る。従つて末・終がどうあるべきか、目的や目標は何かを明確にした上で、本・始をキチンと固めてから手順宜しく段階を踏んでいけ、とこゝ迄を締めくくった。

さて、「大学」首章の「明德」「親民」「止至善」を「三綱領」と称してその意味するところを述べた。次に述べる「格物」「致知」「誠意」「正心」「脩身」「齐家」「治国」「平天下」を「八条目」と呼ぶ。

古の明德を天下に明らかにせんと欲する者は、先ずその国を治む。その国を治めんと欲する者は、先ずその家を斉(ととの)う。その家を斉えんと欲する者は、先ずその身を脩む。その身を脩めんと欲する者は、先ずその心を正す。その心を正さんと欲する者は、先ずその意を誠にす。その意を誠にせんと欲する者は、先ずその知を致す。知を致すは格物(後述)に在り。格物して而る后知至る。知至りて而る后意誠なり。意誠にして而る后心正し。心正しくして而る后身脩まる。身脩まりて而る后家斉う。家斉うて而る后国脩まる。国脩まりて而る后天下平らかなり。

為政者たらんとする君子の為すべき本末・終始を、本・始から最終目的である末・終までを段階ごとに区切ったもので、繰り返して強調した文章になっている。格物

致知 誠意 正心 脩身 齊家 治国を経て君子の最終目的である平天下すなわち天下を平らかにすることができる、と言っているのである。朱熹流に言えば、格物と致知は学問修養を指し、誠意と正心は道德練磨を指し、学問修養と道德練磨を併せて脩身となして「脩己 = 修己」、それをやって次に齊家・治国・平天下という「治人」が可能になり天下泰平の世が実現する、という論旨である。

天子より以て庶人に至るまで、忝に是れ皆身を脩むるを以て本と為す。その本乱れて末治まる者は否(あら)ず。その厚き所の者薄くして、その薄き所の者厚きは、未だ之れ有らざるなり。

前項を受けて、平天下を目的・目標として天命を受けた最高位の為政者たる天子は当然のこと、庶民であっても脩身することが人が処世する上で欠かせぬ本になる、厚くすべき本(脩身)を度外視して平和な治世や家庭が現出することは無いと強調しているのである。以下「大学」は「明明徳」「親(新)民」「止至善」について更に補追した後、「誠意」「正心」「齊家」「治国」「平天下」について具体的に述べていくという構成になっている。

「格物・致知」について説明しておこう。 先ず「大学」に新注を施して古来からの解釈にメスを入れて儒学に新しい哲学旋風を巻き起こした朱熹は、「物を格(いた)して、知を致す」すなわち、格物の格を「至る」、物を「事柄」と読み、致知の知を知識、致を推し極めると解釈した。彼の考えは、「総てのものには道理が備わっているので、既に明らかになっている事柄を土台に、知識をどこまでも推し進めてあらゆる事物の上に研究し至らねばならない。知識を徹底的に尽していれば、きっといつか豁然と心眼が開け、万事の表裏精粗が氷解して通ずることができる」とした。すなわち「格物・致知」を知識的研究の重要さと解釈したのである。知的研究で万事に通達した人物は、ややもすれば人欲で揺れ動く「意を誠にする」ことができる、と以下の「誠意」「正心」そして「脩身」に至る本が固まる筈だというのである。

朱熹没後約二百七十年遅れて登場した王陽明も「聖人の学」を志し、若い頃朱熹の格物学から入った。友人と相談して、庭に生えている竹を切ってきて机の花瓶に挿して、「この竹に一体どんな道理が備わっているのか」と一週間考え込んだが分からず、ついに病気になってやめた。その後任侠・騎射・辞章・神仙・仏教の所謂五溺に迷いながら、思わぬ災厄にあって左遷された竜場という駅丞の山中で忽然、「格物・致知」の意味を悟ったのである。

陽明によれば、「物を格(正)して、(良)知を致す」すなわち、格を「正す」、物を「凡そ意のあるところ」と読み、知を良知、致を徹底的に実践すると解釈した。彼の考えは、「心即理で、天から授かった心には良心や生まれながら物事の是非を峻別する神靈的な良知が備わっている。その天真無垢な良心・良知に従って道理を弁え実践していくことが格物・致知である」としたので有る。すなわち朱熹が学問研究を極めてからものごとを知ったのち行動せよ、と説いたが陽明は心の良心・良知に従って行動することこそが重要である、と帰結した。「誠意」こそが「脩身」に至る本固めであるというのである。

かくして「大学」の始教は「格物・致知」がポイントなりとする朱子学派と、「誠意」こそがそれだとする陽明学派に大きく分かれて、周期を繰り返しながら知識重視対実践行動重視の論争に発展して言ったのである。我が国では江戸時代に官学として朱子学が採用され、藤原惺窩、林羅山、木下順庵、室鳩巢、貝原益軒、山崎闇斎等がその系統とされ、中江藤樹、熊沢蕃山、三輪執斎、大塩中斎、山田方谷、春日潜庵等を陽明学派としている。山鹿素行、伊藤仁斎、荻生徂徠等は孰れにも所属せず、古学の復帰を訴求した。

さて、「大学」は、庶民を統治する為政者やリーダーたる君子の要諦を、修己治人にあるとし、それを「三綱領」「八条目」の実践であると規定した。「三綱領」とは明明徳・親民・止至善であり、「八条目」とは格物・致知・誠意・正心・修身・齐家・治国・平天下であることは前回までに述べた。そして「大学」は、これ以降、「三綱領」「八条目」の重要性についての根拠を「書経」「詩経」などの「聖典」を引用し、具体的事例を挙げ、論旨を展開していく。

康誥に曰く、克く徳を明らかにす、と。太甲に曰く、諛の天の明命を顧る、と。帝典に曰く、克く峻徳を明らかにす、と。皆自らを明らかにするなり。

上記文章は「明明徳」について、「書経」の「康誥」「帝典」「太甲」三篇から、武王を補佐して周王朝を築いた礼楽制度の大成者である名宰相・周公や、殷王朝を創始した湯王の名宰相・伊尹(いいん)の言葉や、聖天子であった堯帝のことを引用して、**皆自らを明らかにするなり**、すなわち、古聖賢が自ら明徳を磨き庶民にそれを示したことを述べている。以下簡単にそれぞれの言葉が出ている箇所を下に抽出しておこう。

康誥に曰く、克く徳を明らかにす、と。

「書経」周書の康誥篇。周公・成王に対する周公の兄弟である管叔・蔡叔らの叛乱が治まり、

殷の残された人民を康叔に治めさせることにしたが、そのときの康叔への戒め。即ち、
＜周公が成王に代わって次のように言った。「諸侯の長たる、我が幼い弟、封(康叔)よ、爾の偉大な亡き父上・文公は、**克く徳を明らかにし**罰を慎む。敢えて鰥寡(哀れな民)を侮らず。庸(用)うべきを庸い、祗(敬)うべきを祗い、威(おど)すべきを威して、民に顕わる。以下略＞

太甲に曰く、諛の天の明命を顧る、と。

「書経」商書の太甲上篇の冒頭。太甲は即位したが、伊尹の教えに従わず、その父の喪に服することさえ知らなかった。伊尹はそこで、王を桐の地に追放した。三年後、王が過ちを悔いて改めたので、都に連れ戻した。その度々の諫めをもとにした「太甲」三篇が作られた。即ち、
＜湯王のあとを嗣いだ王・太甲は、阿衡(宰相)である伊尹の教えに従い徳を修めなかった。そこで伊尹書を作りて(諫めて)曰く、先王、湯王は、**諛の天の明命(明らかな命令)を顧みて**、以て上下の神祇に承く(奉事した)。故に上天は、湯王の徳を視て天子に足ることを知り云々＞

帝典に曰く、克く峻徳を明らかにす、と。

「書経」虞書の堯典。帝典は堯典。もと虞の史官が堯のことを記した。即ち、
＜堯は、**克く峻徳を明らかにし**、以て九族を親しむ。以下略＞

湯の盤銘に曰く、苟(まこと)に日に新たなり。日々に新たなり。又日に新たなり、と。康誥に曰く、新民を作(お)こす、と。詩に曰く、周は旧邦と雖も、その命維(こ)れ新たなり、と。この故に君子はその極を用いざる所なし。

この章は、「親(新)民」について解説している。湯の盤銘の湯(とう)は、殷王朝の創始者。殷王朝は土地の名にちなんで「商」ともいう。紀元前千六百年頃の成立といわれている。「殷王朝」に関しては、たくさんの遺跡が発掘され、亀甲や牛骨等に刻まれた甲骨文字の解読も進み、文明の全容がかなり分かっている。興味のある方は、貝塚茂樹先生の「古代殷帝国」(みすず書房)や「古代中国」(講談社学術文庫)などで研究してみて戴きたい。

さて湯王は「日新王」とも渾名(あだな)される高德の王で、毎朝洗顔する洗面器に、「苟に日に新たに、日々に新たに、又日に新たなり」と刻んで日々の修養に励んだといわれている。善行を誇らず、罪は総て自分の責任である、という全責任を担当する強いリーダーシップを、身を以て示した天子である。尚、「盤」は、「盥水を承けるもの(礼記)」「沐浴の盤(朱子)」などの説があり、もとは祭事に使用する器の一つであったそうである。

康誥に曰く、新民を作(お)こすは、「書経」・康誥篇にある言葉。殷王朝を滅ぼし周王朝を築いた武王が没した後を継いだのが成王である。幼帝であった成王は周公の補佐を得て政治を執行したが、周公の弟である管叔・蔡叔が反乱を起こし、それを平定した。殷の残された人民を統治すべく派遣されたのが周公末弟の康叔であった。その際に作られた訓戒が「康誥」である。王曰く、

＜嗚呼、康叔よ、身に病あるかの如く慎め。天は恐るべきもの。誠あるものを助ける。民の情を察すべきだ。小人は安んじ難いからだ。いって汝の心を尽くし、安閑と逸事に耽るなかれ。(中略)嗚呼、康叔よ、汝王道を広め、殷の民を安んぜよ。王を助け天命に適って作新民(新民を作興せよ)＞

詩に曰く、周は旧邦と雖も、その命維(こ)れ新たなりは、「詩経」・大雅・文王篇。

＜文王 上に在り 於(ああ)天に昭(あら)わる
周は旧邦なりと雖も、其の命維(こ)れ新なり
有周(周の徳)顕(明か)ならざらんや 帝命時ならざらんや
文王(の御霊は)陟降(のぼりくだり)して 天の左右に在り＞

文王は武王・周公の父。文王は善を積み徳を重ねた。先祖の遺徳を慕い、仁政を敷き、老人を敬い年少者を慈しみ、賢者を尊んで彼らを礼遇するのに食事も惜しんで応対した。文王は何事も公正に処理したので、諸侯は争い事があると、みな彼に訴えて仲裁を依頼した。ある時、虞と芮という二国の間で争訟が起き、決着がつかないので、西伯(文王)に決めてもらおうと西伯のいる周の国にやってくると、周の境界に入るや、田を耕す者はみな畦を譲り合っていた。それを見た二国の人には恥じて、西伯に会うのを取りやめ急遽国に帰り、お互い譲歩し合って争訟を決着した。それを聞いた諸侯は、「西伯こそ天命を受けた君主に違いない」と語り合った、という。「論語」にこのころの周の徳を誉めた孔子の言葉が載っている。

孔子曰く、〔文王、西伯となりて〕天下を三分して其の二を有(保)ち、以て殷に服事す。周の徳は、其れ至徳と謂うべきのみ。(泰伯第八の二十)

(孔子が言われるには、西伯・文王は、諸国の旗頭となり、天下を三つに分けたその二つを所有しながら、尚、殷に従って仕えていた。周の徳はまあ最高の徳だと言っていいだろう、と)

この故に君子はその極を用いざる所なしは、そういう訳で、君子たるものは湯王が日新を重ねたために夏王朝の桀王に代わって殷王朝を創始し、周の文王が至徳を重

ね民を慈しんだために武王の代で紂王を放伐して周王朝が創始されたように、「親(新)民」の極致を尽さねばならない、といっているのである。朱子は「書経」の「作新民」を重視して、「親民」が「新民」のことであると解釈したのである。

詩に云う、邦畿千里 惟(こ)れ民の止まる所、と。詩に云う、緡蠻(めんばん)たる黄鳥 丘隅に止る、と。子曰わく、止まるに於いて、その止まる所を知る。人を以て鳥に如かざるべけんやと。詩に云う、穆穆(ぼくぼく)たる文王、於(ああ)緡熙(しゅうき)にして敬止すと。人君と為っては仁に止まり、人臣と為っては敬に止まり、人子と為っては孝に止まり、人父と為っては慈に止まり、国人と交わっては信に止まる。

これは止至善について、「詩経」を引用しながら説明しているのである。詩経に曰く

邦畿千里 惟れ民の止まる所(「詩経」商頌・玄鳥)

<邦畿千里 惟れ民の止まる所 ……殷 命を受くること咸(ことごとく)宜し 百禄是れ荷う>

緡蠻(めんばん)たる黄鳥丘隅に止る(「詩経」・綿蠻篇)

<綿蠻たる黄鳥 丘隅に止まる (注:綿蠻は、鳥の鳴く様子)

豈に敢えて行くを憚らんや 趨(走)る能はざるを畏る。之に飲ましめ之に食はしめ 之に教え之に誨(教)え、彼の後車に命じ 之に之を載せよと言う …… >

引用した綿蠻篇第二聯は、微賤の兵士が上司にかく扱って欲しいとの願望比喻が詩趣であるが、ここでは冒頭句を用い、「黄鳥でさえ止まるべき場所があるのに」、を言いたいための断章取義。

穆穆たる文王、於(ああ)緡熙にして敬止す

<文王の孫子 本支百世 (本家も分家も栄えて百世まで繁栄せん)……濟濟たる多士 文王以て寧(安)し。穆穆たる文王、於(ああ)緡熙にして敬止す 注:穆穆は深遠、緡熙は輝き渡ること>

(文王は聖徳以て、天命を受け、天下に王たるの業を築いた。そのように)

永く言(ここ)に命に配し、自ら多福を求む (ようにせねばならない)

この詩の如く、人君ならば仁、臣たらば敬、子たらば孝、父たらば慈愛、国人との交際には信という善徳を磨き、かつ最高善に至るまで練磨し続けよ、の意。

詩に云わく、彼の淇澳(きいく)を瞻(み)るに、緑竹猗猗(いい)たり。斐たる君子あり。切するが如く、磋するが如く、琢するが如く、磨するが如し。瑟たり、憫たり、赫たり、喧たり。斐たる君子あり。終に誼(忘)るべからずと。切するが如く、磋するが如しとは、学ぶを道(い)うなり。琢するが如く、磨するが如しとは、自ら脩むるなり。瑟たり、憫たりとは恟慄なり。赫たり、喧たりとは威儀なり。斐たる君子あり。終に誼(忘)るべからずとは、盛徳至善、民の忘る能はざるを道(い)うなり。

これは止至善の工夫が切磋琢磨にあることを言っている。詩は衛風・淇澳篇。

彼の淇奥を瞻れば	淇(川の名)の川隅を見渡せば
緑竹猗猗たり	緑の竹草が瑞々しく生い茂る
斐たる君子あり	ああ、輝ける武公の盛徳は
切るが如く磋るが如く	切磋された学問の力とともに
琢つが如く磨くが如し	琢磨された人徳修養の賜物だ
瑟たり憫たり	その面持ちは威厳があって
赫たり喧たり	威儀に溢れて光り輝いている
斐たる君子あり	ああ、輝ける武公の盛徳は
終に誼るべからず	愛慕して永久に忘れられない

切磋は骨を切り、角を削るように学問に専心して研鑽すること。琢磨は玉石を打ち磨くように徳を万練して涵養すること。上に立つ者が、所謂切磋琢磨して知徳を練磨して至善に至り持続させる工夫を述べたのである。そのようにして修身した為政者は、武公の如くその面持ちは威厳があって威儀に溢れて光り輝き、下民から愛慕して永久に忘れられない盛徳者になる筈だ、というのである。

詩に云う、於戲(ああ)、前王忘られずと。君子はその賢を賢として、その親に親しむ。小人はその楽しみを楽しんで、その利を利とす。ここを以て世を没(終)えて忘れざるなり。

詩は周頌・烈文篇。周王朝の文王・武王を歎美したもの。君子は過去の名君をはじめ、優れた賢人や彼らの遺した賢明なる遺物や遺法を賢として継続維持し、それを親同然に親しむ。一般の民衆たちは、彼らが遺してくれた文化を楽しんで、各々の業に励んでそれを利とする。そんなわけで、立派な為政者や賢人は没しても忘れられない存在であるのだ、といっているのである。

子曰わく、訟(うったえ)を聴く、吾猶人の如きなり。必ずや訟を無からしめんかと。情なき者はその辞を尽くすことを得ず。大いに民の志を恐る。これを本を知ると謂う。

(孔子が言うには、「私は訴訟を聞いて裁くのは人とさして変わらないだろう。それより、諸侯に説いて訴訟が起こらぬような政治をさせたいと思う。それができれば、誠のない者は虚偽の言を述べることができなくなる。上の者の徳が民の心をそうさせるからだ」、と。このように、訴訟の未然防止こそ本を知る、というのである)

これは「物に本末有り、事に終始有り。先後する所を知れば則ち道に近し」とあった本末の重要性について訴訟の例を以て述べたものである。「子曰わく、訟(うったえ)を聴く、吾猶人の如きなり。必ずや訟を無からしめんかと」は「論語」の顔淵篇に同文が載っている。孔子が日頃弟子たちに言っていた言葉なのであろう。

所謂その意を誠にすとは、自ら欺くなきなり。悪臭を惡むが如く、好色を好むが如し。これこれを自謙と謂う。故に君子は必ずその独を慎むなり。

「大学」はいよいよ修身の根源である誠意、正心について述べ、事例を以て展開していく。先ず今回は上掲の「誠意」について論述した部分から解説していこう。

上文を概訳すれば、「所謂誠意とは、自分を欺かないことをいう。たとえば、人ならば当然悪臭を嫌い、美色を好むようなものだ。これを自謙すなわち自ら謙(快)くするというのである。従って、君子は必ずその独を慎むのである」、と。

澄み切った自分の心がそう感じた又は思った通りの意が誠意である。心の奥の良心が感受した意念が誠意である。濁った状態でない自分に忠実である心が誠意である。そう感じて自ら満足する心が誠意である。この自謙という言葉に重み加わる。自己中心的でこれはヤバイな、と感じた心は誠意ではない。

人には私欲・雑念があって、必ずしも良心に忠実で日々を過ごしているわけではない。そこでその独を慎む必要がでてくるのである。独りいて誰も見張っていないときに於いて、良心に返る工夫を積まないといけない、というのである。清澄で穢れ無き心の、良心の声に従うべく意を整えることを誠意と言っているのである。

小人閑居して不善を為す。至らざる所なし。君子を見て、而る后、厭然としてその不善を揜(覆)いて、その善を著す。人の己を視るや、その肺肝を見るが如く然り。則ち何をか益せん。これ中(うち)に誠あれば外に形(あらわ)ると謂う。故に君子は必ずその独を慎むなり。曾子曰く、十目の視る所、十手の指(ゆびさ)す所、それ厳なるかなと。富は屋を潤し、徳は身を潤す。心広く体胖(ゆた)かなり。故に君子は必ずその意を誠にす。

小人閑居して不善を為す。至らざる所なし。

閑居は暇でいること。小人、つまりつまらぬ人間は、暇を持て余す。又、暇で閑居しているときは下らぬ妄想や私欲に捕われる。他人の見ていないところでは不善をなして至らざることがない。

君子を見て、而る后、厭然としてその不善を揜(覆)いて、その善を著す。

厭然としては、恥じて隠すさま。小人は、閑居して不善を為すが、君子の徳行を垣間見て恥ずかしく思い、自分の不善を覆い隠して善者の如き振る舞いをするのである。

人の己を視るや、その肺肝を見るが如く然り。則ち何をか益せん。これ中(うち)に誠あれば外に形(あらわ)ると謂う。故に君子は必ずその独を慎むなり。曾子曰く、十目の視る所、十手の指(ゆびさ)す所、それ厳なるかなと。

他人がその人を見抜くことは、肺肝を見透かすように的確で、隠し立てしたって何の益があるか。これを「心の内に誠があれば、外に自然と現れる」というのである。心に潜む邪悪は隠そうにも隠せない。従って、君子は必ず誰も見聴きしない独りでいるときこそ、身を慎む修業をするのである。

曾子が言うには、「あまたの人々が見るところや指差すところは、厳しくその人の真髓を見抜くものであるから、まことに恐れ慎まねばならない」と。

富は屋を潤し、徳は身を潤す。心広く体胖(ゆた)かなり。故に君子は必ずその意を誠にす。

富は家屋を麗しくするもの。同様に徳は我が身を麗しくする。徳は心を広くし身体も豊かに潤す。従って君子は必ず意を誠にするのである。「心広く体胖(ゆた)かなり」を「心広ければ体胖(ゆた)かなり」と訓じる人もある。この場合は、君子は小人と異なり、閑居しても独りを慎むので、厭然と隠す必要も無く心が晴天白日で心もゆったりしているの、自然と体が麗しい、となる。いずれにせよ意を誠にすることから修身の第一歩が始まるのである。

所謂身を脩るは、その心を正しくするに在りとは、身、忿懣(ふんち)する所あれば、則ちその正を得ず。恐懼(きょうく)する所あれば、則ちその正を得ず。好樂する所あれば、則ちその正を得ず。憂患する所あれば、則ちその正を得ず。心焉(ここ)に在らざれば、視れども見えず、聴けども聞こえず、食らえどもその味を知らず。此れ身を脩むるは、その心を正しくするに在りと謂う。

修身の原点は「誠意」にあることを前回述べた。次のステップは「正心」にある。上掲文章はこの「正心」について論じている。人は何か事に遭遇して、忿懣(ふんち)したり、恐懼(きょうく)したり、好樂する所があったり、憂患する所があったりすると、その心の状態に左右されて正鵠を得たものの見方や判断ができずに歪んでしまう。則ち「正心」でいられないため、「心焉(ここ)に在ら」ざる状態になり、自分が自分で無くなってしまう危険がある、というのである。

忿懣の忿も懣も共に「怒る」こと。恐懼は「恐れおののく」こと。好樂する所は「好み楽しむ」こと。憂患する所は「憂い患う」こと。そんな心の状態でものごとに対処しようとしても、心焉(ここ)に在らざれば、視れども見えず、聴けども聞こえず、食らえどもその味を知らず、となつてその真実を見失ってしまう。修身して善行を施す為政者たる者が、「正心」を求められる所以である。「誠意」「正心」整って、はじめて「身を修める」ことが可能になるのである。

所謂その家を齊(ととの)うるはその身を脩むるに在りとは、人その親愛する所において辟す。その賤惡(せんお)する所において辟す。その畏敬する所において辟す。その哀矜(あいきょう)する所において辟す。その傲惰する所において辟す。

「家を斉えるには身を修めることが大切だ」と先述したが、身を修めることが出来ないと、人は親愛する所、賤惡(せんお)する所、畏敬する所、哀矜(あいきょう)する所、傲惰する所に辟す(偏る)、と言っているのである。一家の中でも自分が親愛したり、賤

しみ憎んだり、畏敬したり、憐憫の情に駆られたり、驕ったり侮ったりする者によって対応を偏ったのでは、うまく治まらない。修身が重要なのはそのためである、と。

故に好んでその悪を知り、悪んでその美を知る者は天下に鮮(少)し。故に諺にこれ有り、曰く、人その子の悪を知るなく、その苗の碩(多)いなるを知るなしと。これ身修まらずんば、以てその家を斉(ととの)うべからずと謂うなり。

従って、自分が好きな者でも相手の欠点は欠点として認め、逆に嫌いな者にも長所は長所として認める者は、天下に稀である。だから諺にも曰く、「人は愛する子の悪を知らず、自分の田畑の苗の多いのを知らない」、と。修身の出来ていない者は、欲心や偏頗な心を以てものごとを判断してしまうので、結局、一家さえ斉(整え)ることが出来ないのである。以上、ここまで「誠意」「正心」が「修身」の本で、「修身」しなければ「齐家(家を斉える)」ことが出来ないことを論述してきた。

所謂国を治むるには、必ず先ずその家を斉うというは、その家教うべからずして、能く人を教うる者はこれ無し。故に君子は家を出でずして教えを国に成す。孝は君に事うる所以なり。弟は長に事うる所以なり。慈は衆を使う所以なり。康誥に曰く、赤子を保つが如しと。心誠にこれを求むれば、中(あた)らずと雖も遠からず。未だ子を養うことを学んで、而る后嫁する者あらず。

「格物」「致知」「誠意」「正心」を以て「修身」し、その後「齐家」を全うできれば、「治国」が可能になる。いよいよこの章から、「治国」について循々と述べられていく。ここでは「齐家」はすなわち「治国」の基であることを「齐家」に関する徳目で関連付ける。

曰く、家長として家人を教導できなくて、国家を教え導くことはできない。君子はその如く、「齐家」の徳目に準じた行いを治世に施せばよいので、何もいわずに「齐家」以外の際立った徳目を用いて人民教化する必要はないのである。たとえば、親に孝の精神で君に仕えたり、悌順な気持ちで上長に仕えたり、子に慈愛を以て接する如く庶民に接すれば民衆を使うことができるのだ、と。

又曰く、「書経」の康誥篇に「赤子を保んずるがごとくせば、民は安らかに治まらるであろう」とあるように、国家を治めるにも慈愛の心あれば民を安らかに統治できる。母親が赤子を思う心さえあれば、そう間違った養育をすることはない。未だかつて嫁入り前の娘が、子育てを十分学んだ後に嫁す者などいない。為政者も誠の心に満ちてい

れば、画策練らずとも、「当らずとも遠からず」の善政を敷くことが可能である、と。

一家仁なれば、一国仁に興る。一家讓なれば、一国讓に興る。一人貪戾(たんれい)なれば、一国乱を作(為)す。その機かくの如し。これ一言事を債(敗)り、一人国を定むと謂う。

かくして、国を預かる為政者たる者の一家が仁で満ちれば、一国に仁政が敷かれ、国中に仁風が興るし、一家が讓なれば国中に讓風が醸成される。反対に為政者一人貪欲で利を貪れば上下交々利を争って国乱れるのである。その機すなわちものごとのはずみというのは、このように上に立つ者の一身一家にあるのである。これが古語に「一言の過失は事を敗り、一人の中正は国を定む」とある所以である。

堯舜天下を帥(率)いるに仁を以てし、民これに従う。桀紂天下を帥いるに暴を以てして、民これに従う。その令する所、その好む所に反すれば民従わず。この故に君子はこれを己に有して、而る后これを人に求む。これを己に無くして而る后これを人に非とす。身に蔵する所恕ならずして、能くこれを人に諭す者は、未だこれ有らざるなり。故に国を治むるは、その家を斉うるに在り。

これは、先の文章を受けて実例を挙げて例証したのである。すなわち聖天子であった堯舜の時代、民衆はその大徳に感化され民風実に仁愛に満ちたものだったが、暴虐なる桀紂の治世下では、人々は苛酷に耐え、疑心暗鬼・面従腹背の相欺きあう風習が蔓延したとされる。一体に庶民は、上の命令に対して、本人が言っていることとやることが異なる場合、従わないものである。従って、君子たる者は自分が法令や命令したことを率先して遵守できてはじめて民にそれを守らせるものだ。自分が出来もしない或は守れもしないことを要求すべきではない。民とて皆な愚者にあらず。為政者に恕すなわち己を顧みて他人を思いやる心無くして、下々を教導できた例(ためし)はない。すなわち国を治めんとするには、先ずは「齐家」からなのである。

詩に云う、桃の夭夭たる、その葉蓁蓁(しんしん)、この子ここに帰(嫁)ぐ、その家人に宜しと。その家人に宜しくして而る后以て国人を教うべし。詩に云う、兄たるに宜しく弟たるに宜しと。兄たるに宜しく弟たるに宜しくして、而る后以て国人に教うべし。詩に云う、その儀式(違)わず、この四国を正すと。その父子兄弟と為って法(のっと)るに足りて、而る后民これに法るなり。これを国を治むるはその家を斉うるにありという。

これは、「詩経」の周南・桃夭篇、小雅・蓼蕭(りくしょう)篇、曹風の鳴鳩(しきゅう)篇から必要な言葉を断章取義して、「齊家」が「治国」の基であることを駄目押ししたのである。曰く、桃の夭夭たるように明朗育々たる娘が他家に望まれ、兄は兄らしく弟は弟らしくしてはじめて国人の範たるに相応しく、父子兄弟が国法を遵守するようであってはじめて国を正すことができる。そのように一家の老若男女総てが澆刺と生き、父子兄弟が位に素してそれぞれの役割をはたし、家中の者が国法遵守が出来る家を斉えられる家長こそ、為政者として国を治めることが出来るのだ、と。

以下に上の文章に引用された詩の、関係部分のみを掲載しておくことにする。

周南の「桃夭」

桃の夭夭たる、灼灼たる其の華 この子ここに帰(稼)ぐ、その室家に宜しからん
桃の夭夭たる、蕢たる其の実あり この子ここに帰(稼)ぐ、その家室に宜しからん
桃の夭夭たる、その葉蓁蓁たり この子ここに帰(稼)ぐ、その家人に宜しからん

小雅の「蓼蕭(りくしょう)」(周王朝の周公・成王の頃)

蓼たる彼の蕭は 零露泥泥たり (勢い盛んに茂る蕭(よもぎ)は露たっぷり)
既に君子を見ればはなはだ燕にして豈弟なり (天子に会った故機嫌上々、好合す)
兄に宜しく弟に宜しく 令徳、壽豈 (兄と宜しく弟とも宜しく家室安寧王室安泰)

曹風の「鳴鳩(しきゅう)」…鳴鳩は桑鳩。桑の実を好む。子を平等に養うという伝えがある。
叔人君子とは昔日の名君か。言行が事宜に適い、過不及のない人である

鳴鳩桑に在り その子棘(いばら)に在り 叔人君子 その儀忒(疑)わず
その儀忒わず その儀忒わずして この四国を正す

所謂天下を平らかにするはその国を治むるに在りとは、上、老を老として、民孝に興る。上、長を長として、民弟に興る。上、孤を恤(憐)んで、民倍(背)かず。ここを以て君子絜矩(けっく)の道有るなり。上に悪む所を以て下を使うことなかれ。下に悪む所を以て上に事うることなかれ。前に悪む所を以て後ろに先立つことなかれ。後ろに悪む所を以て前に従うことなかれ。右に悪む所を以て左に交わることなかれ。左に悪む所を以て右に交わることなかれ。これを絜矩(けっく)の道と謂う。

ここから末章までが「平天下」について縷々述べられる。「治国」が出来てこそ「平天下」がなされる。士大夫を抱える一家の主が国を治め、所謂諸侯となって善政を敷き、諸侯が諸国を安寧に導いたとき、天下泰平となる。その天下泰平の世を垣間見ると、老人を敬い、庶民の間には孝、弟(悌)という人間として当然なされるべき徳行が巷の隅々まで行われ、鰥寡孤独という哀れな民を憐憫する社会が成立しているはずで、それはとりもおさず総て人々の上長である為政者・君子たるもの手本次第である、と論ずるのである。上が老人を敬い、孝弟であり、無辜の民を憐れむならば、民衆は皆な慕って信服する世が生まれる。これを**絜矩(けっく)の道**というのである、と。

絜矩(けっく)とは、「己を推して人を度(はか)る」ことで、「忠恕」という意味のようだ。すなわち曰く、君子たる者ならば、上司を憎む所があればそれと同じことを部下にしてはならないし、下位者に憎む所があればそれと同じことを上司にしてはならない。前にいる者に憎む所あればそれを以て自分の後の者にしてはいけない、自分の後ろの者に憎む所あればそれを以て前の者に従ってはいけない。左右の者に関しても同様である、と。すなわち「論語」(顔淵篇・衛霊公篇)に「己の欲せざる所は人に施すことなかれ」とあるが、自分から他人を推量して思いやることを**絜矩(けっく)の道**というのである。

詩に云う、**楽只(らくし)の君子は民の父母と。民の好む所これを好み、民の惡む所これを惡む。これをこれ民の父母と謂う。詩に云う、節たる彼の南山 維れ石巖巖たり。赫赫(かくかく)たる師尹(しいん)は民具(共)に爾を瞻(見)ると。国を保つ者は以て慎まざるべからず。辟すれば則ち天下の僂(りく)となる。詩に云う、殷の未だ師(もろもろ)を喪はざりしとき、よく上帝に配せり。宜しく殷に鑒(鑑)るべし 駿命易からずと。衆を得れば則ち国を得、衆を失えば則ち国を失うを道(言)うなり。**

ここは、「詩經」の小雅・南山有台篇、小雅・節南山篇、大雅・文王篇を引用して、庶民の父母としてその願う所を為し、民衆の意を得た者こそ為政者としての天命を全うすることが出来ることを述べている。**辟すれば則ち天下の僂(りく)となるは、絜矩(けっく)の道**に外れて偏頗なやり方をすれば、人心は離れて或は内乱が起こり、身を滅ぼすようになるやもしれぬぞ、ということ。以下に上文の「詩經」から引用した部分のみを掲げておく。

小雅・南山有台篇

南山有杞北山有李 南山に杞(ひいらぎ)あり北山に李(すもも)あり
樂只君子民之父母 樂只(らくし)の君子は民の父母 樂只 = 楽しい
樂只君子德音不已 樂只(らくし)の君子は德音已(や)まず

小雅・節南山篇・・・周末の幽王の頃、時代は乱れ乱れた。民の憂憤を籠めた詩

節たる彼の南山 維れ石巖巖たり
赫赫たる師尹は 民具に爾を瞻る 師尹 = 太師の任にあった尹氏のこと
憂心慄(焼)くが如し 敢えて戯談せず
国既に卒(ことごと)く斬(絶)ゆ 何を用ってか監みざる

大雅・文王篇

殷の未だ師(もろもろ)を喪はざりしとき、克く上帝に配せり
宜しく殷に鑒るべし 駿命易からず
.....

この故に君子は先ず徳を慎む。徳あればここに人あり。人あればここに土あり。土あればここに財あり。財あればここに用あり。徳は本なり、財は末なり。本を外にして末を内にすれば、民を争わしめて奪うことを施す。この故に財聚(集)まれば則ち民散じ、財散ずれば則ち民聚る。この故に言悖(もと)って出ずる者は、亦た悖って入る。貨悖って入る者は、亦た悖って出ず。

これは、先に為政者の務めは、先ず仁徳を磨くことで、そうすれば人集まり、国土が開け、財が生まれることをいい、「徳は本なり、財は末なり」と本末を釘刺した上で、上なる者の財貨・言動の用い方次第によって、国の興亡が決まることを述べている。すなわち曰く、厳しく収斂して為政者の本に財貨が集まれば、民衆は塗炭の苦しみに喘いで離農し終には国から逃れ他国に散じると、上なるものが私欲を貪らず庶民のための政策に財政を投資したり、飢饉の年には国庫を開放したりして合理にもとって散財すれば、庶民は帰農し職工は群れ集まる。この理同様、言葉の過失は結局のところ為政者自身に誹謗の言として返り、財貨を私欲に耽って不正に得る者は又、悖って出ていってしまうものなのである、と。

康誥に曰く、これ命常においてせず、と。善ならば則ちこれを得、不善ならば則ちこれを失うを道(言)うなり。楚書に曰く、楚国は以て宝と為すなし。ただ善以て宝と為すと。舅犯(きゅうはん)曰く、亡人は以て宝と為す無し。親に仁なるを以て宝と為すと。

ここは、「書経」「礼記」を引用して、上に立つ為政者・君子の重要事が善事を為すことであり善人を得ることが至宝であると考えたことを述べている。周書・康誥の最終章に、「王曰く、嗚呼、ゆえに汝小子封、惟れ命、常に于いてせず。汝念へ、云々」とある。又、楚書に曰く、楚国は以て宝と為す無し。ただ善以て寶と為す、は「国語」・楚語に次の記事あり。

＜楚の大夫の王孫圉が晉に使者として行った。晉の国君・定公がこれを饗した。趙簡子は佩玉を帯びて、玉を鳴らして王を補佐していた。趙簡子が王孫圉に訊ねた。「楚の有名な佩玉である白珩(はくこう)は未だありますか」と。王孫圉答えて曰く、「ありますとも」。趙簡子「その宝物は幾世紀ほどになるのか」。王孫圉「未だ嘗て寶となさず。楚の寶とする所の者を觀射父という。能く訓示を作りて、以て事を諸侯に行い、寡君を以て口実と為すなからしむ。また左史倚相あり。能く訓典をいいて以て百物を叙し、以て朝夕に善政を寡君に献じて、寡君をして先王の業を忘るるなからしむ。云々」＞
舅犯曰く、亡人は以て寶と為す無し。仁親以て寶と為す、は「礼記」檀弓下篇に次の記事がある。＜晉の献公の喪に、秦の穆公が、亡命中の重耳に、今を逃さず君位を襲うべしと薦めた。重耳が舅犯(孤偃)に告げると、言った。「孺子(重耳)其れ辞せよ。喪人(亡人)は寶無し、仁親以て寶と為す。云々」＞

秦誓に曰く、ここに一個(いっこ)の臣あり。断断として他技無し。その心休休焉としてそれ容るあるが如し。人の技ある、己これを有するがごとし。人の彦聖(げんせい)なる、その心これを好む。ただにその口より出ずるがごときのみならず。まことに能くこれを容る。以て能く我が子孫黎民を保んず。尚(ねが)わくば亦た利あらんかな。人の技ある、媚疾して以てこれを惡む。人の彦聖(げんせい)なる、これに違うて通ぜざらしむ。まことに容るる能わず。以て我が子孫黎民を保んずる能わず。亦たここに殆(危)いかなと。
これを唯、仁人のみ能く人を愛し、能く人を惡むと為すを謂うなり。賢を見て挙ぐる能わず、挙げて先立つ能わざるは命(まん = 怠慢)なり。不善を見て退ける能わず、退けて遠ざくる能わざるは過(あやまち)なり。

「書経」・秦誓に次の記事がある、として賢人の一例を挙げ、こうした賢人を抜擢して職務を任せれば子孫黎民を安寧にすることができるし、不善人を見極めて退け放免する度量がないと国家は乱れ天下泰平を築くことができない、と論じているのである。どんな臣が抜擢すべき人材なのか。曰く、

<ここに一人の臣下がいて、誠実にして真面目一方で、他技とて無い者がいるとする。ただその心は休休として他人を容れる度量があるようで、他人に優れた技量あれば、自分がある如く寵愛し、彦聖なる有徳の士には心から敬慕する。しかもただ口で称賛するのみならず、彼を大いに受け入れる。こんな人物を用いたならきっと業績も上がり、子孫黎民を安んずることが出来るだろう。一方で、他人に優れた技量あると、嫉んで憎み、彦聖なる有徳の士には妨害して出世の道を阻む者がいるとする。こんな人物を抜擢しようものなら子孫黎民が安んずるわけがない>

これを仁人のみ能く人を愛し、能く人を惡むと為すというのである。 いずれにせよ、賢人を見て抜擢することが出来ず、抜擢したまではよいが、彼に任せて思い切りやらせることが出来ないのは怠慢といわねばならない。又、不善なる人物を見て更迭し、かつ遠ざけることができないのは過ちである

人の惡む所を好み、人の好む所を惡む、これを人の性に拂(もと)ると謂う。菑(災)必ずその身に逮(及)ぶ。この故に君子大道あり。必ず忠信以てこれを得、驕泰以てこれを失う。

絮矩(けっく)の道を繰り返し述べれば、他人が憎み嫌がることを好み、人が好み願うことを嫌がるとすれば、これを「人の性に悖る」といわざるを得ない。そんなことをすれば災いは必ずその身に及ぶことは必定である。従って、人の上に立つ君子には大道がある。天下を得るには忠信が欠かせず、驕慢に安泰しているとそれを失うのである。

財を生ずるに大道あり。これを生ずる者衆(多)く、これを食する寡(少)し。これを為(作)る者疾(と)く、これを用いる者舒なれば、則ち財常に足る。仁者は財を以て身を發し、不仁者は身を以て財を發す。未だ上、仁を好んで下、義を好まざるはあらざるなり。未だ義を好んでその事終えざるはあらざるなり。未だ府庫の財にしてその財に非ざるは有らざるなり。

これは、為政者たる君子が心得るべき理財の道を説いている。「平天下」すなわち天下泰平の世は、為政者が修身して明明徳たる仁徳を天下に著して、親民して赤子を保んずるが如き誠意に満ちた慈愛で、庶民を思いやると同時に、財用を豊かにする必要がある。経済原理を弁えたリーダーであることも必須の要件となる。曰く、その原理は、農工に携わり、生産に従事する者が多く、遊民と称す徒食の輩や、役人等で不要な人群が出来ただけ少ないこと、そして生産効率が高く、消費を過度なからしむようにすれば、すなわち財用は適切なバランスを得るのだ、と。

又曰く、仁徳ある為政者は、かくして収攬した財を人民のために有効に活用すれば身を發するに足り、不仁者は財を己の欲望・享樂のために財を發して天下を騒亂の渦に陥れてしまう。古来、上なる為政者・君子が仁を好み庶民を慈しんで、下々がその義に感じないということはなかった。そして人々が義を好んでしかも事ならずということとはなかった。未だかつてそうして蓄財した府庫が有用財でなかった例はないのである、と。

孟獻子曰く、馬乗を畜うるものは鶏豚を察せず、伐氷の家は牛羊お蓄えず。百乗の家は収斂の臣を蓄えず。その収斂の臣有らんよりは寧ろ盜臣あれと。これ国は利を以て利と為さず、義を以て利と為すを謂うなり。国家に長として財用を務むる者は、必ず小人による。彼これを善くすと為す。小人をして国家を為(治)めしむれば菑(災)害竝(並)び至る。善者ありと雖も亦たこれを如何ともする無し。これは国は利を以て利と為さず、義を以て利と為すを謂うなり。

魯の国の賢大夫であった孟獻子曰く、「出世して始めて馬乗を蓄う、すなわち四頭立ての馬車を引く馬を養える身分になったら鶏豚を自分の家で養い食すことはやめ、民から買うものだ。又もっと出世して葬祭に使用する氷室を用いる程の家柄になったら、牛羊を養わず民から買うものだ。そして戦争になれば車百乗ほど出すべき領地を持つ身分になったら、小作人から租税を厳しく収斂する臣下を養わないものだ。収斂して民の膏血を絞り取る臣下を養うくらいなら寧ろ、主家の財を盗む臣下がいた方が、民を損なわぬだけでした」と。この言まことに然りで、これを「**国は利を以て利と為さず、義を以て利と為す**」というのである。財用の道は、特定の階級の者がより足し前することではなく、それぞれの身分・役割に準じて分業・共存出来ることにある。財が権利者に集中して偏在することではない。さて、古来国家の財物を豊かにせんと図る責任者は、財用の任に当たる者を、君子ではなく、小人を用いることが多い。錢勘定に敏いためである。財用がいかに重要だとしても、この小人に国家を治めさせると、専ら私

利に奔る危険がある。それは災害の本である。財を司る小人が権力を握ると、善人がいたところで如何ともしがたい。十分配慮し人選を誤ってはいけない。これすなわち「**国は利を以て利と為さず、義を以て利と為す**」というのである。後世これを「義利の弁」などと称している。要は先述した如く「**徳は本なり、財は末なり**」を重々忘るべからず、と言っているのである。(以上)